

関
卷

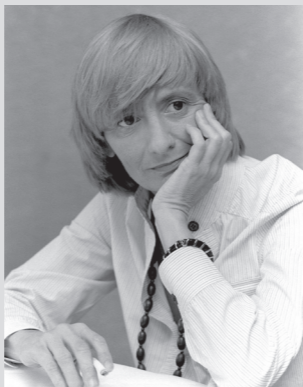
晩
年

人
間

2000年代編

〈第3回〉

関
川
夏
央



写真提供：共同通信社

早熟という「不運」

—フランソワーズ・サガン—

- Françoise Sagan
- 小説家
- 2004年9月24日没(69歳)
- 肺塞栓

二〇〇四年九月二十四日、フランスの小説家フランソワーズ・サガンの死が伝えられたときの感想は、「え？ まだ生きていたの？」であった。そうした軽い驚きののちに覚えず自分の上を通過した五十年を思い、サガンの上にもおなじだけの時間が流れたのだ、とあらためて思いをいたしたのである。

しかし年若い日本人は、さしたる感慨を持たなかっただろうと思う。彼女は一九五〇年代の、鮮烈な、しかし遠い輝きであった。

世界を覆った十九歳の「アンニユイ」

一九五三年八月、『悲しみよ こんにちは』を書きあげたとき、フランソワーズ・クワレスは十八歳になったばかりだった。

その年、ソルボンヌ大の学年末試験の成績はひどいものだった。おとなに混じってカフェに入り浸り、まったく勉強しなかったから当然の結果であった。失望の色を隠さぬ両親を慰めるために、あるいは見返すために、彼女はひと夏かけて二百五十枚ほどの小説を書いた。

「キキ」とあだ名されたフランソワーズ・クワレスが、マルセル・プルーストの作中人物からとった筆名フランソワーズ・サガンで発表した『悲しみよ こんにちは』はこんな小説である――

主人公は十七歳の少女セシル。

彼女は父親とその愛人、三人で地中海に面した南仏の別荘で夏のバカンスをすごしている。「六カ月おきに女を替える」父親は四十歳、今度の若い愛人はあまりものを考えるタイプではない。だからセシルは気に入っている。

そこにアンヌという中年女性が出現する。アンヌは父より二歳上、セシルが二歳のとき死んだ母親の友人である。「高慢で人生に疲れた、美しい顔」の持主のアンヌに、父親はたちまち魅了され、再婚を決意する。それはセシルにとって重大な危機である。友人であり、セックス抜きの恋人でもあるような父親、それに父親の若い愛人をまじえた呑気な暮

らしが崩れ、アンヌによる管理の時代の始まりを意味するからだ。

セシルは自分のボーイフレンドと、父親に捨てられた愛人を使って、わざとアンヌを怒らせる。アンヌは怒りと悲しみを押し殺しつつパリへ向かって車を走らせ、途中で事故死する。セシルに残されたのは、残酷な結末を演出したあとに生意気な少女が味わう、晩夏の「アンニユイ」である――

この作品は五四年の批評家大賞を受け、彼女には「マドモアゼル・ラディゲ」というあらたな異名がたてまつられた。「恐るべき早熟さ」という意味である。フランソワ・モーリアックは彼女を「魅力的な小悪魔」と呼んだ。

『悲しみよ こんにちは』は二十五カ国語に翻訳されて世界的ベストセラーとなった。日本では五五年、朝吹登水とみこ子が翻訳して出版、やはりよく売れた。たちまち世界的著名人となったサガンと親しんだ朝吹は、その後も『ある微笑』（五六年）、『一年ののち』（五八年）、『ブラームスはお好き』（六〇年）とサガン作品を翻訳して刊行した。朝吹登水子訳は八六年の『愛の中のひとり』までつづいたが、この年サガンは五十一歳、朝吹は六十九歳だった。

戦前日本のフランスとフランス文学への好意と高評価は、大正時代の高村光太郎の詩と堀口大学の翻訳詞華集『月下の一群』に負うところが多い。彼らの仕事によって、パリは「芸術と芸術家の都」だと日本人は

認識したのである。一八七〇年、普仏戦争での無残な敗北以来、日本陸軍はフランスを範とすることをやめたが、その軍事的脆弱さもむしろ「芸術親和性」には幸いした。

昭和初年の「円本ブーム」で高額の一時所得を得、おまけに世界の流れに反した金解禁政策で一時的円高を呈すと、それに乗じた「文士」たちは、カフェと料亭で消尽した一部をのぞいて、家を建てるか欧州旅行に出かけた。欧州旅行の場合、そのほとんどが日本郵船の南回り航路でインド洋、紅海、地中海を経てマルセイユで上陸、パリへ行った。

一方、戦後日本人のフランス・イメージの造形にもっとも多く貢献したのは『悲しみよ こんにちは』だろう。

〈「あなたって変ってるわね」とアンヌが言った。本当に私は変っている〉

思春期には、どの国であれ「変っていること」が誇りであり、拠り所であった。

フランスの恋愛小説はお洒落で上品、そのうえ早熟で「生意気」な書きぶりが受けて、日本では高校文芸部の女生徒を中心に多くのエピゴーネンを生んだ。

その代表的な作品が原田康子『挽歌』だろう。都市化はなほだしい戦後の釧路を舞台に、体に軽い障害を持つ女の子が中年の建築技師を誘惑し、その妻を湿原での自殺に追い込む。「レナール夫人。ジュリアン・ソレル。シモーヌよ森へ行こう。森のニムフは意地悪さ」

主人公の女の子は、北国の窓ガラスの曇りに、こんなことを指で書くのである。ここにもサガンの、また「フランス」の影がある。ガリ版刷

りの同人誌から出発した『挽歌』は、やがて講談社の子会社から刊行されて百万部近く売れた。

五八年オットー・プレミンジャーが『悲しみよ こんにちは』を映画化して、大ヒットした。セシルを演じたのは当時十九歳のジーン・セバードであった。

役者上がりのプレミンジャーは、同年ジーン・セバードを『聖女ジャーヌ・ダーク』の主演に抜擢して、いじめかと思われるまでに鍛えた。その彼女が『悲しみよ こんにちは』では、男の子のように短く刈り込んだ髪型の生意気な少女として登場した。

そのヘアスタイルは衝撃だった。彼女の「セシル・カット」は歌手の九重佑三子このえゆみこやいしだあゆみに踏襲され、「小悪魔」の部分は若い日の加

賀まりこが体现した。岩谷時子作詞、宮川泰作曲、ザ・ピーナッツが歌って戦後の歌謡曲シーンを転換した「恋のバカンス」は、『悲しみよこんにちは』の発展的翻案といえた。

一九五〇年代に取り残された「悲しみ」

若くして成功する「少年得志」は、中年で親に死なれること、老いて妻に先立たれることと並ぶ「人生三災」のひとつだという。

五〇年代のサガン作品はみな世界的ベストセラーとなったが、その後はしだいに自己模倣の気配をおびた。いつも「アンニユイ」では飽きにくる。「早熟」の結晶のようであった彼女を、時代が置き去りにした。

一九八八年以後のサガンの作品は朝吹登水子の娘、朝吹由紀子が邦訳し、

最後に訳された『逃げ道』（九七年）は、河野万里子が担当した。しかし売行きは五〇年代に遠くおよばなかった。

サガンは年を取るのがヘタだった。二十二歳のとき自動車事故で瀕死の重傷を負った。二十三歳と二十七歳で結婚、二番目の相手とは男の子をもうけたが、どちらとも二年足らずで別れた。あまり感心しない取り巻きに囲まれていた彼女は、中年期になると過度の飲酒、賭博癖、スピード狂でタブロイド紙的な話題を提供した。麻薬常習で逮捕され、脱税で起訴された。

ジーン・セバーグの場合は、もつと悲劇的だった。六〇年、二十一歳のとき、フランソワ・トリュフォー原案、ジャン＝リュック・ゴダール監督の『勝手にしやがれ』でジャン＝ポール・ベルモンドと共演した。

脚本家が構想していたベルナデット・ラフォンのかわりに、当時「カイエ・デュ・シネマ」グループのひとりと結婚していた彼女がゴダールに指名されたのである。こうしてジーン・セバーグは映画史上に名前をとどめたが、その後は恵まれなかった。鬱病に苦しんだ末に、七九年、パリの自宅アパート近くの街路に駐車したルノーの中で死んでいるのが発見された。アルコールとバルビツールを併せ飲んだ四十歳の死であった。

サガンはフランス北西部ノルマンディーのカルヴァドス県オンフルルの病院で二〇〇四年九月二十四日、肺塞栓のため死去した。六十九歳だった。「早熟という不運」を背負った人にしては、よく書き、よく生きた。ただし、幼形成熟という言葉を強く連想させるほど、少女のままに老いた。

三井系の著名な実業家・朝吹英二の孫である朝吹登水子は女子学習院を結核で中退ののち、一九三六年パリに行き、ソルボンヌで学んだ。戦後の五〇年に再渡仏、ボーボワールやサルトルと交遊した。二度結婚したが、最初の夫との間の娘が朝吹由紀子である。三兄の翻訳家・三吉の孫娘が作家の朝吹真理子で、長兄の音楽家・英一の妻の妹が、保守政治家・石井光次郎の娘にして日本鋳業創業者・久原房之助くはらの孫、シャンソン歌手の石井好子で、五歳下の好子とは本当の姉妹のように親しみ、パリ時代には共同生活をした。

朝吹登水子はサガンの死の一年後、二〇〇五年に八十八歳で亡くなり、その五年後、二〇一〇年に石井好子は亡くなった。すでにサガンの名前

は年配者の遠い回想の対象となり、一九五〇年代まであればほど日本人に好まれたシャンソンは忘れられた。